OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドイツ「書簡文化」と女性 : ゾフィー・フォン・ラロッシュからベッティーナへ
Author(s)	渡邊, 洋子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49116
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【45】

氏名	渡邊洋子（わたなべひろこ）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第　２１４９０　号
学位授与年月日	平成 19 年 6 月 21 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学位論文名	**ドイツ「書簡文化」と女性－ゾフィー・フォン・ラロッシュからベッティーナへ－**
論文審査委員	（主査） 教授　林　正則 （副査） 教授　柏木　隆雄　　教授　荻野　美穂　　准教授　三谷　研爾

論文内容の要旨

本論文は、18 世紀後半から 19 世紀前半にかけてのドイツ文学史に大きな足跡を残したゾフィー・フォン・ラロッシュ（1731-1807）とその娘であるマクシミリアーネ（1756-1793）、そしてマクシミリアーネの娘ベッティーナ（1785-1859）という三代の女性たちの生涯と作品を通して、その時代における女性と文学の関わりを考察した論考で、序論、第１部（第１章から第５章）、第２部（第５章から第８章）、第３部（第９章から第 11 章）から成り、平成 18 年 12 月に同学社から上梓された。（文献表ならびに索引を含め A5 判 337 ページ。）

まず序章では、18 世紀半ばのドイツで市民階級の勃興と軌を一にした出版文化の隆盛において「女性読者」が果たした役割、「読書」が女性にとって持った意味について時代的な展望が与えられる。教養市民層のイデオロギー的な基礎をなす啓蒙主義によってはじめて「人間」として認められたはずの女性たちが、市民社会の安定とともに、一転して「自然らしさ」「女性らしさ」「淑徳」の名の下に自由な人間性の枠から排除され、男性を補完する役割を強いられ、「感傷主義的な」「通俗文学」の中へと押し込められていく経緯が論じられている。

第１部では、『シュテルンハイム嬢物語』（1771 年）によってドイツで初の「女性小説」（女性を主人公とする小説）の著者たる栄誉を担いながら、従来ほとんど本格的な研究の対象として取り扱われてこなかったゾフィー・フォン・ラロッシュの再評価が試みられている。第１章では、当人の意思に反して女性教育書に分類されてしまった『ロザーリエの手紙』、とりわけグーデン夫人の挿話の詳細な分析によって、「女らしさ」のイデオロギーに対するラロッシュの深い違和感が指摘されている。第２章では、女性が旅の主役ではなくただ単に旅の添景としてしか描かれなかった 18 世紀半ばという時代に、旅する喜びを溌溂と表現した『スイス旅日記』を取り上げ、いわば身をもって「人間」の概念を拡大し多様化したと言ってよいその意義を明らかにしている。第３章では、ラロッシュ評価が急激に下落した晩年の旅日記である『過ぎ去った時の影絵』が取り上げられる。若き日の婚約者であり、彼女の熱心な支持者でもあったヴィーラントとの再会、ゲーテをはじめとするワイマル文化人との交遊の日々を描いた『影絵』を支配している悲しみの音調に、論者は文学という「制度」の成立とともにそこから締め出されていった女性作家ラロッシュの癒し難い疎外感を見ている。第４章では、『若きヴェルターの悩み』のロッテのモデルでありながら、自らはもっぱら家庭人として短い生涯を終えたマクシミリアーネに光を当て、啓蒙主義的教養に支えられた感傷主義作家として活躍した母ゾフィーと、ロマン主義・若きドイツ派の活動にきわめてアクティヴに関わった娘ベッティーナという二つの世代の谷間に「沈黙の世代」として生きたマクシミリアーネが、皮肉にもいわゆる「美しい女性性」の理想としてドイ

ツ文学にその面影を残すことになった逆説的な事情を通して、当時の女性作家たちが置かれていた苦渋に満ちた状況が浮き彫りにされている。

第２部の中心テーマはドイツにおける「書簡文化」である。第５章では、当時の女性たち、とりわけロマン派の女性作家たちと「書簡」との関わりとその意味を考察し、ベッティーナの書簡体作品『ギュンデローデ』の分析を通して、手紙を書くという行為そのものを作品化し、それによって新しい自己表現を模索したベッティーナを書簡文化の精華と位置づけている。第６章では、「書簡体作品」というジャンルに内在する虚実の問題を論じ、ベッティーナの書簡体作品は生（虚）と芸術（実）の分離を拒否することによって、「ドキュメントとしての真実」ではない、過去と現在を貫いている「人格的真実」の創造であるとしている。第７章では文学史でも言及されることの多い『ゲーテとある子供の往復書簡』の再評価が試みられている。おおよそ 30 年前の往復書簡に自由な改変を加えて編まれたこの作品は、出版当時、私的なものを公けにし、オリジナルを恣意的に取り扱っているとして轟々たる非難にさらされた。しかし論者はそうしたベッティーナの姿勢に、作品の中心をあくまで内的な出来事に置き、オリジナルに躍動していた「愛」という「根源的な体験」を日常的な次元から解き放とうというひたむきな意図を読み取っている。第８章では、ベッティーナの最も若い時期に属する兄クレメンス・ブレンターノとの往復書簡を 40 年後に編集し作品化した『クレメンス・ブレンターノの春の花冠』が取り上げられる。ベッティーナの作品中もっともロマン精神に満ちたものとされるこの作品は、兄妹の深い愛がやがて離反にいたる推移を美しく濃やかに描き出している。しかし、それは過去の「失われた楽園」に対する哀惜では決してなく、自己と世界との軋轢に痛ましく傷つきながらも、青春に今一度立ち帰り、「生の全体性」を回復することで、そこから新たな行動へと踏み出そうとするベッティーナの「重層的な成熟」を示す作品だと、論者は述べる。

第３部は当時のドイツ文学の流れのなかにベッティーナを位置づけようとする試みである。第９章では、「感傷主義」とベッティーナの関わりを論じている。兄クレメンスとの関係に決定的な亀裂をもたらしたのが「感傷主義」をめぐる応酬であったが、手紙というまさに「感傷主義を醸成する器」の中でそうした応酬が行われたという奇妙な経緯を通して、性差をめぐる社会的な力関係の変化が浮き彫りにされる。そしてベッティーナが断固として拒否しようとしたものは、「感傷性」そのものではなく、そうした力関係に絡めとられ、それを象徴する役割を担った「感傷性」であったことが明らかにされる。第 10 章では『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に対するベッティーナの共感と批判が、「純粋に愛しつづける者」としてのミニヨンと「独占的に特別なものに向かう情熱としての愛を知らない」ナターリエという対照的な二人の人物像に対する姿勢を通して明らかにされる。論者は、ミニヨンの死を容認することができなかったベッティーナが、「発言する主体となって生きつづけるミニヨンの書」として『ゲーテ書簡』を書いたのだと述べる。第 11 章ではゲーテの連詩『ソネット』の成立に関わったベッティーナの役割とその意味が論じられる。ゲーテが自分の『ソネット』にベッティーナの手紙から多くの素材を得ていることはよく知られているが、そのことは詩人の単なる「戯れ」として従来真剣に扱われてはこなかった。論者はしかし、『ソネット』という詩形式の「真剣さ」と「戯れ」とが絡み合うそのあわいに、「愛」を自分の人生の中心課題として生きようとするベッティーナの肉声ともいうべきものを聞き取っている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、18 世紀後半から 19 世紀前半にかけてのドイツ文学史に深くかかわったラロッシュ家３代の女性たちの作品と活動を通して、近代ドイツ文学における「女性と文学」の関わりを歴史的に問い直すきわめて意欲的な労作である。それはまた、ゲーテ・シラーの古典主義以来、規範ないし制度として機能してきた「正統的文学史」の背後に長らく押しやられてきたいわば「埋もれた文学史」を掘り起こす試みでもあり、論者のそうした意図は本論文において十分に果たされている。

論者は、啓蒙主義期から古典主義期、さらにはロマン主義期にいたる大きな文化変動の中で、ドイツの女性たちが私的な日常性を越えて広く世界や社会と関わることが許されたのは「読書」と「旅」と「書簡」という三つの限られた文化領域であったことから、それらの領域における「公」と［私」の複雑な絡み合いを周到に解きほぐしながら、

女性作家たちの苦渋に満ちた困難な文学的営為を説得的に印象的に浮き彫りにすることに成功している。それは、論者がドイツでもほとんど顧みられることのなかった女性作家たちの作品、ならびにその周辺の膨大な量にのぼるテクストを精力的に渉猟し、丹念に読み解くという根気の要る作業を長年にわたって継続してきたことによって可能となった。ゾフィー・フォン・ラロッシュについてもベッティーナについても、文献学的な周到さをいささかもなおざりにすることなく、テクストの行間に深く分け入って二人の作家の内面を追体験しようとする論者のひたむきな姿勢が、彼らの人間像を生き生きと浮かび上がらせ、論述に独自な迫力を与えている。今後、埋もれた女性作家たちを掘り起こし再評価する動きが加速すると思われるが、本論文は今後のそうした研究の展開において特筆すべき位置を占めるであろうことは言うを俟たない。

ただ、ドイツ教養市民層のイデオロギーとしての啓蒙主義の二重性、つまり啓蒙主義が建前としては「普遍的人間性」を主張しつつ、他方では「淑徳」「美しい女性性」という名のもとに女性たちを私的な領域へと押し込める文化プログラムとして機能するに至った経緯について、またそうした変化がゲーテ・シラーの古典主義の成立と相携えていたとする指摘について、もう少し踏み込んだ考察が欲しかったし、また雑誌論文を纏めたという出版の経緯から記述の重複がまま見られ、構成に今ひとつ工夫があってもよかったように思われる。ベッティーナの「書簡体作品」の論述には、論点を具体的に例証する引用がもっと多くあってよかったし、そうすれば記述がいちだんと生彩に富んだものになったであろう点も惜しまれる。

しかし、それらは本論文がドイツ文学研究において果たした多大な寄与をいささかも損なうものではなく、よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。